

---

# 三日月が見下す夜に

栄音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

三日月が見下す夜に

### 【NZコード】

N3622Y

### 【作者名】

栄音

### 【あらすじ】

無頓着に生きれば苦しまずには済む。身内が死んだところで僕の人生に影響はない。そう思っていたのに。高所恐怖症だった姉が転落死。事故か自殺か他殺か偶然か。真実を探し求めようと自分に動搖する。学校に忍び込み、鍵を入れ、”自殺禁止”の張り紙が張られた錆びついてる屋上のドアを開けた。そこで、出会う。眞実の鍵を握る少女に。名前を消された指定ジャージを着ている少女に。「その女が人間でも生物でも幽霊でも現実でなくとも、もし、もしあなたがいたら、話せたとしたら…あなたは素直に前を向いて歩

けるの？孤独な世界で偽者の夜空を眺めて綺麗だと言えるの？」

落下。自分の意思で落ちたのか他人の思惑で落とされたのか。

死人に口ナシ。彼女は何も語らない。死体は何も語れない。

白い布を被った姉はどんなに待つても動かなくて。体は

傷や痣だらけで白く美しい肌が不気味に感じられる。

表情筋は強張り、固まり、美人だった面影はない。

父は怒鳴る。母は喚く。妹は泣く。僕は見つめた。

冷たくなった姉を。脈もない手をぎゅっと握んで。

検視によれば主な死因は転落死で間違いないらしい。

草花のお陰で地面に直撃は避けたらしく骨は数本折れた

だけだったとも医者に聞いた。ならば、なぜ姉は死んだのか。

高所恐怖症だった姉が、どうして転落死に屋上を選択したのか。

分からぬ。僕は姉の何を見てきたんだ。考えても分からなかつた。

物事に無頓着な僕が、死にたくないから生きているだけの無意義な

僕が

姉の死を悔やんでいる。事故だろうが自殺だろうが他殺だろうが関係ない。

身内が死んだところで僕の人生に影響はない。そう思っていたのに。

真実を探し求めている自分に動搖する。アイデンティティが

崩れしていく。造り上げた道が歪んでいく。侵されていく。

どんなに、頑張って努力したって過去に戻れなくとも

姉が最期に残した言葉の真意を僕は知らなきゃいけない。

足を震わせ、階段を1段1段と躊躇つづけに上がる。

生徒会に所属する友人Aに借りた屋上の鍵を握り締めて。

ドアに張られた紙には立入禁止ではなく『自殺禁止』の文字。

行書で達筆に書かれている文字の上手さがなんとなく腹立だしい。  
誰だ、こんなものを書いたのは。姉は自殺する愚かな人間ではない。

父に似たのか、自分の信念や正義を簡単に曲げられる人ではなかった。

屋上のフェンス前に3年生指定の赤いラインが入った姉の上靴が発見され、

自室の机の中には遺書のような手紙が残されていたので、警察も学校側も

飛び降り自殺だと判断した。理由は学力。首席を維持していた姉の成績が

落ち、奨学金制度の対象から外されたことがショックだったのだろう

推測されて。学校で自殺だなんて傍迷惑な。責任者はその程度の

認識だつただろつ。不運。それが大人の捉え方。起きたものは

仕方がない。今後は、どう事件を対処し、世間に対応するか。

世間となるだけ騒がせず、評判を落とさず、有耶無耶にして。

ニュースで文字だけが流れ、新聞で小さな記事に取り上げられ、

波風立てずに穩便に、姉のメンタルの弱さが原因だつたと言われた。

悔しかつた。そんな馬鹿な話があるか。ビジネスマンの父のお陰で  
僕らは

金銭類に関して不自由なく生きてこれたんだ。学費に困るなんて有  
り得ない。

奨学金は付属品にしか過ぎなかつた。そして、プライドの高い女で  
もなかつた。

追い抜かされた人間に見下されても皮肉めいたことを言われても姉  
ならば

馬鹿正直に相手を褒めるだろつ。本心で。嫌味などの感情は含まづ  
に。

世界を愛す世間知らずな姉だが、人を気遣う心と常識は持つて  
いた。

見知らぬ人でも困っていたら声をかけ、自分まで一緒に悩んでしま  
う人だ。

どんな人間も綺麗な心を持つている。それでも、悪い人がこの世にいるのは

可哀想な境遇で生まれ、人間としてよろしくない環境の所為だと信じてたんだ。

僕は姉がいつか宗教勧誘に惑わされるのではないか?と心配するフリをしていたが

それは無駄に終わったワケで、どうでもよいだらう。もう、姉はいないのだから。

誰かの為なら自分の才能が利用されることを光榮だと偽りなく言えてしまつ

姉が苦手だった。他人の為に生きたいと願う姉が僕には羨ましかった。

必要とされるまでじこまでも努力する姉の姿を弟として見てきたが、やつぱり、じこまでも頑張れるのか理解出来なかつたし、

受け入れたくもなかつたのだろう。知らなくてよい世界もあるのかもしれない。こういう人種もいる。そつ捉えて。

つまり、そんな姉の成績が落ち、奨学金がなくなつても

順位や通知表が上がつても下がつても姉は何も変わらない。

負の感情を向けられても相手を哀れむだけだということが言いたい。

しかし、高所恐怖症の姉がこの屋上に足を踏み入れたのは事実だろう。

問題点は、勉強に集中できなかつた理由。姉に”何か”があつたといつこと。

ガチャリ。

鍵を回転させ、睡を飲み込み、ドアを開けた。

ギィィイ。

僕の手は足は体は震えて騒ぎ出す。恐怖ではない。

無上の喜びである。この屋上から落ちて姉は亡くなつた。

1年前のこの日も、こんな風に少し肌寒かつたのだろうか。

深夜の学校に忍び込むとき、どんな感情を抱いたのだろうか。

優等生らしく罪悪感か。それとも、考える余裕などはなかつたか。

知りたかった。姉の全てを。最期に見た景色は何色だったのだろう

?

僕は一年前に姉が最期に見た景色を見ているんだ。

この場所で、この時間に、この景色を見たかったが為に

入試で最高点を狙い、入学式で新入生代表挨拶を引き受け、

委員会は学級委員に自ら立候補し、期末テストは首席キープ。

生徒会の推薦は勉学に集中したいのでと失礼のないよう断った。

通知表も何処の誰に見せても恥じぬ数字を並べ、優等生のフリを。

姉のように凛と正しく真面目な期待される優等生を演じてみせた。

姉の生き[『]じの生きる僕を気持ち悪いと狂つてると母は侮蔑の眼差しを向けた。本当のお兄ちゃんはどう?と妹は涙を浮かべていた。父はそのまま頑張れと褒めてくれた。

高校生活を送る上で必要なものは何だらう?姉なら

「うーん。大切なモノを間違えない心…かな」と

答えてくれるだらう。田を瞑れば聞こえてくる。

天国から僕に呼びかけてくれるソプラノ声が。

目を瞑れば脳裏に見えてくる。幸せそうな

笑みを浮かべて高らかに笑い転げる姉が。

姉は永遠に僕の心で生き続けるだろう。

「どこに存在意義を求める必要があるの？」

不満そうに悲しそうに姉は質問を質問で返した。

人間は生きる意味を理由を根源を探し求める生物である。

存在意義を求めることは本能に従つて生きることだと僕は思つ。

だから、来た。僕の存在意義を掴む為に。姉に起きた真実を探す為に。

ガタツ

僕はフェンスに上る。屋上を囲つフェンスを軽々と飛び越えた。

「人間より綺麗なものはあるのかな」雲がない澄んだ夜空を見上げ、

深呼吸する前に疑問を溢す。姉は人間より素晴らしいものは存在しないと

言っていた。姉が人間の神秘を楽しそうに語る姿が鮮明に思い浮か

べられる。

「人間ほど汚いものは存在しないわ」

あどけない少女の声が背後から聞こえた。ガシャン。背中にぬぐい重みが与えられる。

誰だろう。聞き覚えのない声。当然、ソレゾレ逆方向を見ているので顔が見えない。

「いやいや、ひへだりなこと」とで歎んで苦しんで溜め込んで本能に従つて生きる。

後先短くなつても社会貢献し終えても必要とされなくとも毎日寝ては起きては

理屈ばかり並べて権利を主張する人間のどこが綺麗だと言えるの？」

「うそやうとした口調で少女は問うた。姉なら、どう答えるだらう。

「それでも。そんなとこも全部ひっくるめて素晴らしいんだ」

『あなたも心を持てば世界が愛おしく思えてくるわ』だろうか。

「下等生物を見下して、社会問題だと騒ぐ人間が素晴らしいの？」

括りが大きいな。」「人間は遺伝と環境で変化し、成長し、進化しているから

多種多様な人格が生まれる。長所は、良く言えば個性で、悪く言えば欠点になる」

「だか  
ら、人間を」  
はあ。どうして僕は顔も見えぬ少女に語つて いるのだろ? 「だか

一括りにするな。屋上を囲うフローランスを挟んで、背中を預け合ひ僕と少女。

ふつ。と少女が笑った気がした。「あなたは夢を持つて生きれる?」

「アタシはね、子供の頃から叶えたくても叶えられない夢を持つてるの」

夢。そういうえば、優秀な姉の夢を叶えるのは、ひねくれ者の兄のはずだった。

「キミは人間に産まれてきただことを後悔してるのかい?」「そうかもしれないわね。

自分を優先する自分が嫌いだもの。相手を優先する偽善者も。見え透いた汚い心も

三日月になりたい。アタシは無機物になりたいの。命は死せる運命を持ち併せてるから。

「ははっソレは興味深いな。キミは月の裏側は欠けているとしても言いたいのかい?」

「アタシは自分で見たもの以外は信じないって決めてるの」「衛星写真を見給え」

「『』、合成かもしれないでしょー」んなワケあるか。現実主義者でもなくなる。

理屈を並べているのはキミじゃないか。「ふん。あなたはどうなのよ?」

「肉眼では確認できない星になりたかったと思つたことはあるよ」

姉の主義に従い、ふぞけた質問には真面目にふぞけて答えた。

声からずゐに幼い印象を受けるが、この女の子は誰だ？

深夜だぞ。学校だぞ。屋上だぞ。何故ココにいるんだ？

誰か来るなど予測しておらず、鍵は閉めてなかつたが

女子生徒が自殺したと噂された立入禁止の屋上に

入りうるとする人がいたとは。一体どんな神経を

しているのだろうか。という疑問は自分に

そのまま跳ね返ってきてしまつので

投げかけなかつた。投げかけられなかつた。

驚いた様子で「あんた兄弟とかいたりする？」

おれるおれるといつか期待するように訊ねられる。

「いたよ」過去形。「綺麗事を並べる優秀な姉がね」

その姉も僕が現在立つてゐる場所から落ちて死んだ。

その上の兄に僕は会つたことがない。「車に轢かれちゃつた」

13年前。病弱で通院してた7歳の兄が信号無視をしたらしい。

転んで避け切れなかつただとか。当時の姉は6歳で。自業自得だ

と兄の「写真を破いた。それは僕の知つてゐる姉らしくない行動だつた。

少女は勝手にがっかりし、ビリビリもよきりこ「ふーん。間抜けな  
人ね」

と勘違いした。もし、その優秀な姉はココから転落死したんだと言  
つていたら

僕らは会わなかつたことにしただらうか。「アタシにもいたわよ。  
お兄ちやんが

ガシャン。屋上を囲うフェンスを上る。背中越しに聞こえていた声  
はだんだん近づく。

「弱虫で泣き虫で頼りなかつたわ」過去形だつた。30cm程度し  
かない足場に腰掛け、

空を切るように足をぶらぶらさせる。落ちれば姉のようになると無事では  
済まないだろ？。

恐くないのか。「キミは家族と他人との境目はどこにあると感ひへ  
「何よソレ」

僕もフェンスを背もたれにして少女の隣に腰掛ける。少女はジャ一  
ジだつた。

見覚えがある。『この学校の指定ジャージだらう。……否、なんでもない』

しかし、月と星の明かりは暗くてよく見えないが、それはボロボロで名前が消されていた。『ライオンは青色』。一年生。僕と同学年だった。

「今夜も二日月が素敵ね」うつとりした視線で少女は夜空を見渡した。

ココが何処だか理解しているのだろうか。真夜中の学校の屋上のフェンスの外側だぞ。姉が見た最後の景色を知りたくて僕は

臆することなく飛び越えたが、この少女も迷うことなく

足をグラウンドがある外側に放り投げて居座った。

この子が誰であろうともいいけど「今夜も？」

だんだん興味が湧いてきた。姉が転落死したこの屋上は

すぐに生徒立入禁止で封鎖されたが、幽霊やらオカルトやら

噂に振り回された生徒が好奇心に胸膨らませて騒がれていたらしい。

階段付近で叫んで上っては下りを繰り返し、寒気がしただと見えただとか。

肝試しや度胸試しスポットにされていたとか。でも、そんな噂も落ち着いた頃に

屋上へ繋がる階段から転落し、入院した先輩がいた。誰かに突き落とされたと

自由していたが、ソレは体を張つた嘘だと見抜かれ、誰も相手にしなかつた。

そんな阿呆で惨めな先輩が退院したかどうかはどうでもよいので語らない。

3年生が卒業して僕らが入学してからは飽きたのかパタリと噂も静まって

屋上に近づく物好きもいなくなつたと聞いていた。僕は今日が来るまで

状況と条件が揃う機会が来るまで努力し、思いを馳せ、待っていた。

姉が最期に見た景色を見たくて。もちろん、誰にも告げていない。

疑問を口にする。「キミは昨日も『』に来たのかい?」「そうよ

三日月を見つめたまま答えられた。「鍵が閉まつていただろ」「そうね」

まさか。「合鍵を作ったのか?」「ハズレ」生徒が亡くなり、噂が広まつた後は

学校側が管理を怠つた所為も否めないとのことでの鍵の保管場所は厳重になつた。

僕がこの鍵を手に入れるのだって半年以上も時間がかかつてしまつたんだ。

そう簡単に盗み出すことも、合鍵を作ることも、出来るワケがなかつた。

そもそも姉が死んでからこの1年で鍵は3度も変わったのだし。

「決められた道は嫌いな」意味ありげに微笑む少女は

手を合わせる。「三日月になれますよ！」と願いを込めて。

姉は父方の苗字を名乗っていたので、僕は母方の苗字で学校生活を送っている。

怪談話や幽霊話に花を咲かせず、話を合わせるより姉の情報を集める為に。眞実を

知る為に。屋上の鍵を手に入れる為に。信頼を芽生えさせるのに時間はかかったが

庶務とはいえ、生徒会に属する人がクラスにいたのは幸運だった。その友人Aに

転落死した弟だから屋上の鍵を貸してくれと言ったわけではない。飽くまで

自分の身分と目的を隠して器物損害に当たつてしまつことを事故に

見せかけた上で計画的だ。正式に借りたワケではないので

帰りに職員室に忍び込んで返しに行く手間はあるが。

それでも、成功したんだ。こうして、僕は屋上にいる。

だから、見知らぬ少女が屋上に入り、フェンスを飛び越え、

当然のように僕に話しかけてきたことが不自然でおかしかった。

少女は僕が屋上に来るのを知っていたはずがない。屋上のドアが開くと

知れるワケがない。実際には、少女は昨日も一昨日も気まぐれに訪れていて

ドアから侵入したのではなかつたが。ソレを僕が知るのはもう少し先の話でして。

深夜の学校に忍び込む人がいると僕が思わないように少女も誰かがいると思わない

はずだ。しかし、少女は動搖しなかつた。それどころか、僕を動搖させる言葉を投げた。

「遅えぞ、梅垣」臆することなく椅子に腰掛け

だらしなくネクタイを緩めて制服を着こなす友人A。

「他のヤツらバラバラでよ…知らねえのばっかいるぜ」

飛永の後ろ座席に荷物を下ろす。「諸戸さんは文系だっけ」

四月。学年トップだった僕は、2年前の姉と同じく理系クラスを希望し、親しい友人はおらず、留年とも縁の欠片もなくクラス替え。生徒会庶務の飛永は、携帯を弄つて「茄那は5組の鳩先クラスだよ」

バスケ部の彼女を心配する。「…それはお氣の毒に。人を巻き込むなよ」

諸戸さんは昨年のクラスメイトで派手な外見や騒がしい性格で誤解されやすく、

一部の女子から嫌われていたようでちょっとした揉め事があつた。陰湿なイジメを

していた女子に「ダサッ」と正面に向かって言つたとか。悪事や感情を包み隠せないようで

彼女は良き事も悪き事も他人事でもストレートに発言してしまう。  
詳しく述べたまでは

知らないが、敵を作りやすいのだね。飛永はその裏表のない性格に惚れただとか言ってたが。

「オイオイ。相手は生活指導の鳩渕だぜ？ もうとっくに目付けられてるだろーよ」お手上げだ

と両手を挙げたポーズをする。ピロリロリン。手に持っていた飛永の携帯が鳴り出した。

噂をすれば。彼女からのメールだつたらしい。「フリィ。ちょっと行つて来るわ」

「始業チャイム鳴るぞ」僕は無意味な忠告をし、改めて新たな教室を見渡す。

学年が上がったからといって規模も構造も変わらない。緊張してるのが

知り合いがないのか割合大人しく一人で過ごしてゐる人が多い。

「あの。すみま。せん」ぎゅっと鞄を掴む手が震えていた。

茶髪を三つ編みにした女の子。太ぶちメガネがずれる。

「座席。どー。か分かりますか」不自然な途切れ方で

俯きながら訊ねたのは昨年もクラスメイトだった荻原さん。

先生の指示はなかつたよと云ふるとキヨロキヨロと田を泳がせ

「失礼し。ます」空いていた席。僕の隣に決めたようだ。「あの。」

荻原さんは座りつゝ椅子に手をかけるが「迷惑で。したか」上目遣いで

不安そうに聞く。う。可愛い。おどおどとした態度が小動物みたいで可愛い。

スカート丈は膝下だし、メガネは古そつだし、オシャレに興味なさそうだけれど

三つ編みほどいたら雰囲気変わると思つんだよなあ。一つ一つの仕種が危なっか

しくて田が離せないのに、一緒に居るとつこね氣に包まれて穢やかに和んでしまう。

そんなことない。僕は首を左右に振つて否定する。そんなに周りを窺はなくとも

誰も荻原さんを嫌いにならないのになあ。「嬉しいよ。としても」飛永しか

友人はいないと思ってたし。かあつと頬を染めて「ぐ。け。が。え」と

ガシャン。荻原さんは筆箱を落とした。『モリ熊』の筆箱を拾う。

「すみま。せん」謝らないで、と渡して「好きなのかい？」

ガツシャン。訊ねると慌てたように「すみみ。ません」

再び落とした筆箱を拾つた。「可愛いよね。ソレ」

リンゴを丸かじりする熊。「妹も好きだから見たことがある」

「どんジ。リーズ。ですか」「たしか、メロンver.…だったかな」

壊れた。「わわわわわ」荻原さんが壊れた。目を輝かせて

「スゴ。イです」「羨ま。しいで。す」と弾んで話しあ出す。

モリ熊はフルーツ盛りだくさんと森を掛けてると教えてくれた。

1年間。同じ学級委員で話す機会は何度も合つて初対面のときよつも

打ち解けてくれたなあ。いつもって言葉をつつかえながらも頑張つて話す

荻原さんは可愛い。応援したくなる。『モリ熊』は、リングゴやメロンだけではなく

色んなフルーツが売っているらしい。妹のミカの誕生日も来月に迫ってきたし、

プレゼントに良いかもしない。「荻原さん」「はい」小物とか大好きだし。

「僕と付き合つてくれないかな」

小さな口をパクパクと開けて「はう。む。ぐあ」よく分からぬ声を

出された。「妹にモリ熊を買つてあげたいんだ」と説明すると

「あ。そゆい。とです。か」と頃垂れ落ち着きを取り戻す。

「かし」ま。りました」萩原さんはずれた分厚い太ぶちメガネをかけなおす。

しどろもどろになりながら「不束者で。すが」とお辞儀された。天然100%だ。

でも。そんなどこが「可愛いんだよなあ」と葉を漏りすと教室のドアが傷ついた。

「とんび薦将軍。眼球が腐りました。助けてください」「では、早速治療しましょ。オペの準備を」

キーンゴーン。カーンゴーン。チャイムは繰り返す。「分かりずらくイチヤツかないでくれ」

諸戸さんと飛永は2人で同じ椅子に座る。「5組に戻らなくて大丈夫?」出席点呼の時間だけだ。

「担任なら来ねえぜ」諸戸さんに聞いたのに飛永が答えた。「そんなことより、手術を。第一患者を

優先してぐださい」力チカチと携帯を弄りながら飛永に寄りかかっているのは、彼女の諸戸さん。

訳。私の話を聞いてください。「職員室に行つたんだけどよお」飛

永も携帯を弄りだし、話しだす。

「深刻な顔で、始業式を中止するわけにはいかない。でも、保護者が。評判が。つて騒いでたぜ」

荻原さんは首を傾げた。そこで、やつと気が付いたらしく。「なんだ、いたのか。相変わらずだな」

「「じめ。んなやこ」ペコっと荻原さんは謝る。だから、やつこののがよお…と忠告し始める飛永を

僕は遮る。「なんで職員室に行つたんだい?」「まあ…その、「歯切れ悪く答えるので「抗議しに」

諸刃さんが答えた。「私がどうして薦と離れなくてはいけないのか」説明を願おうと思いまして」

分かるだろ?と飛永はジョスチャーする。暴走して生活指導の鳩渦先生と揉める前に止めよう

うとしたのだらう。「授業を受ける暇たそうな表情が今後一切見られなくなってしまうなど

私にはとてもとても耐えられません」「んなの見てんじゃねえよー…」だから、イチャつくな。

案外。2人はお似合いだと思つてゐる。美男美女。生徒会の飛永薦とバスケ部期待の諸戸茄那。

「離れて暮る恋心とも言つし、余えない時間が増えるほど、飛永が

優しくなるかもよ」「否定します

飛永と同じクラスになりたかったなら、理系クラスを選べばよかつたのに。嘘でも吐かれたのか。

「梅垣。適当なこと吹き込んでんじゃねえよ」まあ、僕が巻き込まれなければどうでもいいけど。

問題を起しそれでは困る。飛永は目立つ存在だから。生徒会といつものもあるが、容姿が。

生徒会長を目指すには相応しくない頭髪だと思つけど、それは古くさい考え方。

否、問題はそこではなく。つまり。一緒にいる僕までもが目立つては困るということ。

悪い意味で。『転落死について調べまわっている男子生徒がいる』と噂になつては動きににくい。

「鳶は、私の鳶は誰よりも優しい心を持つていますから。これ以上優しい人間にはなれません」

優しい心。僕は、姉に出会うままでそんなものを信じていなかつた。人間は優しいフリは

出来るが、優しくなれない。他人の為には優しくなれない生物だと思っていたから。

「席に着きなさい」

担任と思われる男性が咳き込んだ。教室は静まる。

ゾロゾロと適当に席に着く生徒に紛れて諸戸さんは帰った。

自宅ではなく自分の教室に帰つてることを願おう。飛永は僕と荻原さんに

彼女がいたことを黙つてもりつよう人差し指を口に添える。「クリ。頷いておく。

「挨拶は後回しにする。全員いるな?.. 突然だが、今日の始業式は中止だ。荷物を纏めろ」

ピー・ポー・ピー・ポー。パトカーのサイレンが繰り返される。学校に近づいてるのか音が大きくなる。

警告。窓の外を見て立ち上がる生徒が1人。3人。ゴホッ。わざとらしく咳き込み「席に着きなさい」

渋い声で怒鳴る担任。初日は嘗められないよつこと威張つてゐるのとは違つ。そんなものを見るなど

田を瞑る。外に何があるといふんだ?「先生」と窓際に座つてた黒髪の女子生徒が手をあげる。

「…どうして救急車を呼んであげないんですか」

結局、何があつたのか詳しく述べられず、始業式は中止になつた。

ピンポンパンポンと校内放送が流れる。落ち着いて生徒は速やかに帰りなさい。

先生方は事情聴取がありますので、時間がある方からお集まりください。

飛永は生徒会長である兄貴なら何か知っているのではないかと電話をかけるが

「繋がらねえ」電源を切られていようつだった。「あんのクソ真面目野郎がつ」

会長は機械音痴ではないが、一日中、携帯を見ないのは普通らしい。煩わしいから、とサイレントモードに設定されているとか。

「お兄様は既にご帰宅されているのでは。私たちは、帰りました」「お前は俺ん家に来たいだけだろ」諸戸さんの無表情は無表情になつた。

僕らは廊下側の席だったので窓の外に何があつたか見ていないし分からぬ。

始業式が中止。只事ではないのは説明されずとも、全校生徒に伝わつただろう。

校門裏に止まつたパトカーは赤く赤く光つていた。姉が転落死したときはもっと

たくさんの警察が学校に乗り込んでいたのだろうか。ガチャン。自

を外し、押す。「僕も駅まで歩こうかな」何があつたか分からぬから

不安だといふのもある。「すみま。せん」荻原さんはまた謝った。

何か分かつたら教えてくれ、と飛永と諸戸さんに別れを告げてゆつたりと歩く。

飛永に抱きついて自転車の後部座席に乗る諸戸さんは「落ちそうです」と笑っていた。

笑顔。諸戸茄那は笑うことができる。飛永の前だけ。私立中学に通つていた僕は、2人に

何があつたのか知らない。ガキのときから無愛想なヤツだったぜ、と飛永は話していくけど

違和感を覚える。無愛想?たしかに、彼女はあまり感情が表情に出ないようだが、違うだろう。

飛永の前では笑っているではないか。教師の前でも女子の前でも諸戸さんは無表情なのに。

他人には見せない笑顔の正体に、飛永は気付いているのだろうか。知つているのだろうか。

「委員会は決めているかい?」「悩み中で。す」僕は自転車を押し

て歩幅を合わせる。

昨年。僕は自立候補したが、荻原さんは女子に押し付けられたよう見えた。

「梅垣く。んは今。年も学級委員です。か」「委員長を狙つてるんだ」

2年前に転落死した姉と同じように。「大学推薦の為です。か」

「ううん。一般受験希望だよ」「え」どうして?と不思議

そうに首を傾げる。そのまま、成績を落とさなければ

学年トップである僕は第一希望の大学へ受験勉強せずとも

重苦しい努力する」となくとも面接や小論文程度で入れるだらう。

それでは意味がない。「時間はメールで」僕がこの学校に来た意味がなくなるんだ。

今度の日曜日に、妹の誕生日プレゼントを貰つての付合つてもう約束をして

ペダルを漕ぐ。ケータイで時刻を確認した。まだ9時が過ぎたばかりだ。

どうじょうか。真っ直ぐ家に帰つてもいいのだけど、時間がある。

クルリと方向転換し、町の図書館へ向かつ。姉もよくココに来ていた。

家で勉強すると家族が気を遣つてしまつから、と。受験勉強の為とはいえ

落ち着ける場所が欲しかったのだろう。「か行…さ行…つと」誰かとぶつかつた。

「金魚鉢とは金魚の鑑賞を目的とした鉢ですが、矛盾してませんか」

黒髪の女子生徒。先生に質問したあのクラスメイトである。

僕に話しかけているのか？「水草や砂利が入っていても、それは「金魚鉢と呼べるのでしょうか。金魚の飼育方法について述べられている本を

数冊抱えて彼女は訊ねた。「定義の捉え方が違つても、金魚鉢は金魚鉢じゃないかな」

人間が人間であるように。その人はその人で、他の誰にも代替が利かない」と同じように。

「答えが見つからないのは、正解が存在しないのではなく全て正解だからかもしませんね」

ふふっと満足気に微笑んで「金魚鉢は」協力に深く感謝いたします  
背を向けて歩き出し

本棚の曲がり角で彼女は立ち止まつた。上下左右に首を動かし、躊躇つて、確認して、

彼女は振り返り、瞳を揺らした。「ご縁がありましたら、また訊ねてもよろしいでしょうか

それは「構わないけど」縁がなくとも事故がなければ月曜日に教室で会うだろう。

彼女の席は窓際で僕は廊下側。クラスメイトだつたと知らなかつたようだ。

始業式も自己紹介も中止されて、顔を合わせることもなかつたから。

僕だつて彼女が先生に質問しなければ覚えてなかつただろう。

どうして救急車をよんであげないんですか

119番。あの窓から見える位置に怪我人がいたのか。

始業式を中止するほどの怪我を負つた人間がいたというのか？

救急車を呼ばずに警察だけを呼んだ理由。それは。思考を停止する。

考え過ぎだらう。姉が死んだからネガティブになつてているのかもしれない。

まさか。死人に救急車を呼ぶ必要がないから警察を呼んだわけがないと願つた。

クラスメイトと言つても、彼女見たのは今日が初めてだったの有名前が分からぬ。彼女も僕の名前を知つてゐるわけがない。

数分同じ教室にいたとはいえ、顔も見たことがなかつたのだから。ならば、どうして僕に話しかけたんだ？ぶつかったからとは考えにくい。

疑問が浮かんだときに、タイミングよく話しかけやすそうな人間がいたから？

制服を着てゐるから同じ学校だと分かるし、ネクタイの色で同学年だとも分かるし。

高校生という視覚情報が彼女の気を許したといふことだらうか。  
否、どうでもいいか。

うん。どうでもいいや。他人を気にしても仕方がない。それでも僕も世界も何も変わらない。

無音。サイレントモード。僕はメールが来ていたことに気付いたのはそれから1時間後だった。

『帰つちまつたか？』『疑うわけじやねえんだけど』『このメールに気付いたら俺に電話してくれ』

なんだコレ。飛永からのメールは曖昧で要領を得ておらず、何が言いたいのか分からなかつた。

始業式が中止になつたのと関係していることだらうか。図書館で携帯はマナー違反なので

手にとつた本を借りる手続きをすませ、外の自転車置き場に移動して電話をかける。

イチ、二、サン。「ホール音がブツリと切れて弱々しい飛永の声が聞こえた。

「…梅垣だよな?」「他に誰がいるんだよ」

だよな。ワリイワリイといつもの明るい調子にもじれる。

「今どこにいるよ?」「図書館

学校から近えじゃん。と飛永は笑つた。「オイ、やめろつて

「男らしくない鷦将軍は嫌いです。気持ち悪いです。でも、好きです」

雑音が入る。飛永と諸戸さんが携帯を取り合つてゐるらしい。状況が読めない。

「ああーつまりだな…これから学校に来てくれね?話せなきゃならぬことがある」

玄関で待つてると言い残して、電話を切られた。自転車で飛ばして10分つてとこかな。

風が気持ちよい。鳶と諸刃さん一緒に帰つたと思つていたが、学校に引き返したのか。

細い道路の近道を通りて、人を物を犬を避ける。自転車で歩道橋は渡れないな。

駅まで送つたけど、荻原さんはちゃんと家に帰つただろうか。2日後の約束。

田曜日、買い物に付き合つてもひつ約束をしたけど、迷惑だつたかなあ。

妹であるリカの誕生日プレゼントを選ぶ店を紹介してもらつたら喫茶店とかで何か奢りつ。うん。委員会で色々と迷惑かけちゃったしな。

にしても。ここのはやつは遅いな。普段は歩道橋を渡るから気にしないけど。

チラリ。じーっと見られてる。知らない人に。スーパーの袋を持ったおばちゃん。

信号は赤。渡れない。動けない。「…あの」僕に何か?と聞いijifとしたが、遮られた。

「あらまあ一立派になつたわねえ」えつと。「覚えてないかしらあーお隣だつた遠藤よ

「あんた梅ちゃんの子でしょijif高校生になつたのねえ」「母を知つているのですか

「やあねえ。あたしは石竹くんも梅ちゃんとも同級生だったのよ親父も?」「そうでしたか

やばい。全然記憶にないや。誰だ、この人。親父も母さんも僕も知つていてるといijifとは

「あのね。こんなといijifで言つのも、なんだけれどもね…藍花ちゃん、残念だつたわねえ

姉のことも知らないワケがない。お母さんとお父さんによろしく伝えておいてと

挨拶し、「コレつまらないものだけど」とスーパーの袋をがさjijisと荒らし

かりんとつを渡された。「若い人はこいつの嫌いかじり」「いいえ

嬉しいですと社交辞令を述べると信号が青に切り替わる。一礼して

遠藤さんというお隣さんだった人と別れた。全く思い出せなかつた

١٣

「屋上のドアを抉じ開けようとした人物を見たと証言していたな。詳しく述べてくれ」

飛永鳶の兄貴である我が学校の生徒会長に椅子へかけるよう指示される。

「…失礼します」横目で飛永を睨みつつ高そうなソファに座った。

聞いていいだ。どうして僕が会長と話をしなければならないんだ?

「俺ら教室で待ってるからよ」逃げた。飛永と諸刃さんは逃げていった。

それに。その話は昨年に僕が屋上の鍵を手に入れる為に吐いた”嘘”である。

「どうして今頃になつて。始業式が中止になつたことと何か関連があるのですか」

バレるワケにいかない。姉みたいな優等生を演じてきた今までの努力が崩れてしまう。

「一般生徒には教えられん」はあ?「不公平ですね。情報開示を求める権利もないのですか」

では。これにて失礼しますと立ち上るとまあ当然だが引き止められた。生徒会長に。

「座れ」

威圧感。従わなければいけないといつ命令。渋々と、失礼な態度で僕は不躾に腰掛けた。

「以前に全て報告しました。書類に記録されているはずです」「もう一度確認したい」

バレてるのか？勘付かれたのか？確証を得る為に弟を使って呼び出したのか？

前代の生徒会長が卒業したから。だとすれば、昨年から座しまれていた

ことになる。飛永先輩が副会長だった時点で気付いていたとでも？

矛盾が生じないよう気を引き締めて、無駄だとしても訊ねさせてもらう。

「裏門にパトカーが止まつていましたが、何故救急車を呼ばなかつたのですか」

「…一それは生徒会の判断ではない。校長にでも訴えひ」「理由を知りたいんです」

「無言」「答えられん」苛々する。「学校の評判を落とさない為ですか。保身の為ですか？」

「違う。本人の意思だつた」「救急車を呼ばないでくれって病人が申し出たと?」「…そうだ」

んなワケあるか。痛みに苦しむ人間が学校のことを考えていただと?腹が立つ。ムカツク。

「そりやつて石竹藍花が転落死したときも救急車を呼ばずに見殺しにしたのですか!」

会長は眉を顰める。「藍花先輩?」やつてしまつた。自分から墓穴を掘つてしまつた。

「どうしてお前が知つているんだ」「…ニースで見て」ギロリ。嘘を吐くなと目が睨んだ。

新聞やテレビで取り上げられた情報で他人がこんなに感情的になるワケがない。…逃げよう。

居た堪れなくなつた僕が駆け出すタイミングと会長が飲んでいた紅茶をぶちまけるタイミングは

どちらが速かつただろうか。バシャリ。クリーニングしたばかりの制服に染みがついた。

うわ。僕が動搖するのは計算で。「すまん」悪びる」となく会長は口だけ謝つて

ドアにもたれかかる。「質問に答える」「謝の誠意があるなり、どうして頂きたいですね」

生徒会室の簡素なキッチンと布巾を借りて紅茶の染みを落とさせてもらひ。

「お前は死体を見たことがあるか」「…葬式でなら」姉の死体を。そつか。と頷いて黙る。「俺は見たことがない。血痕は残っていたが、近づけなかつたんだ。藍花先輩が

亡くなつたという事実を認めたくなくて」

姉が僕の2つ上だったから、会長の1つ上だったのか。

「見ていない俺が言つのもなんだが、発見された時点で手遅れだつたと聞いた。草花が衝撃を緩和したお陰で傷は少なかつたらしい」

知つてる。覚えてる。真っ白すぎる肌を。強張つた表情を。冷たかった手を。

「だから、救急車を呼んでも」「助からないと決め付けたのは医学の素人でしょう…」

分かつてる。こんなのが言い訳だつて。「…大声出しますみません」でも。姉のことになると

頭に血が上る。「素敵な人だつたな」この話は終わりだと再びソファに会長は座った。

会長は僕と石竹藍花の関係について聞かなかつた。知つてゐると思えないと、

「まあ、本人の意思で救急車を呼ばなかつたという理由は表向きだ」  
布巾でテーブル拭ぐ。「どうで伊佐木先生のこと聞いたかは知らないが…」

伊佐木先生? 「黙つておいてくれ。今年の生徒数も減つているんだ」「評判ですか？」

「誰がそれを?」「考へれば分かるだろ」校長の方針か。「話を戻すが…教えてくれんか」

「今更、屋上の鍵を壊そつとした人を探してどうするんです?」「警察に突き出す」

「そんな」どうじょう。鍵穴を傷つけた罪つて器物損害か? 「だから、頼む」

二度とあんな悪戯をさせないよ!懲らしめたいんだと会長は頭を下げた。

「重く受け取り過ぎでは。犯人は幽霊話に興味があつただけかも

しませんよ」「人のトラウマで遊ぶ愉快犯を許せるか!」

愉快犯？「でも、鍵を開けるのは失敗したんですし」

「やけに犯人を庇うんだな。矢張り見たのか？」

見たも何も僕がやりました。一人演技していました。

なんて言えない。鍵穴を傷つけただけで、警察だなんて。

もしかして。屋上の鍵も無断で拝借したから窃盗罪も問われるのか  
？

指紋を拭きとつて職員室の金庫に戻したが。勿論、合鍵も作ってない。

証拠は残つてないはず。「正直に言つてくれ。生徒会は全力でお前を守る」

「そんなこと言われましても困りますよ」会長はがつくりと肩を落として紅茶の

ティーカップを片付ける。「こんなのが」動物型クッキーを出してきた。

もぐもぐ。懐かしい味だ。僕は帰つてもよいだらうか。あ。「かりんとう食べます?」

「渋いもん持ち歩いているな」「スーパーの袋を持ったおばちゃんに貰いました」

正直に答えたのに怪訝そうな顔をされた。「…不味くない」「甘いですね」

ボリボリ。ボリボリ。生徒会長とかりんといつ。以外と似合つかも。

「飛永もかりんとう食べますかね」「んあ?」会長の苗字も飛永だつた。

「アイツ甘いもん嫌いじゃねえのか?」 「やつでしたっけ」 「知らないけどよ」

飛永が会長をクソ真面目野郎とか呼んでいたし。あまり兄弟つて仲良くないのかな。

「よお、兄貴。梅垣は面白えだろ?」 「薦将軍の皿玉と内臓が強力接着剤で固まりました」

訳。美味しそうなクツキーとかりんとうですな。図々しく飛永は「もうちつと右に行けよ」

手でしつしつと自分の場所を確保する。狭いなじ会長の隣に座ればいいのに。

諸刃さんは飛永の膝の上に座つてかりんとう手を出した。「素敵です」

と飛永の口に詰め込んでいく。「はへろひへ」訳。やめろって。

めんどくさい2人だな。「教室で待ってるんじゃな…」

かつたのかい?と聞いつとすれば。「やつのつもりだったけどよお」

「ナイル川はエチオピア高原が隆起してきた白亜紀以降に形成されたと考えられています」

訳。待ちきれませんでした。生徒会室の壁時計を見る。確かに。動

## 物型クツ キーと

かりんとうを食べていたから氣にしていなかつたけど、もつお匂こなる時間だ。

もともと今日は午前中に帰れる予定だったのでお弁当も用意している。

「話は終わつたんだら…どつか飯でも食ひに行こーザ」飛永は

提案するが、会長はまだ仕事が残つてゐからと断つた。

些細なことでも何か思い出せたら連絡をくれと

会長は頭を下げる。「お役に立てるか分かりませんよ」

数ヶ月前の話だし。僕の作り話だし。「それでもかまわん」

これまで必至だとだんだん罪悪感が芽生えてくるなあ。後悔は

してないナビ。どうして会長が今更搜してこられるのかも氣になる所だ。

「飛永の生徒会副会長就任を祝つて乾杯」カン。

「鳶将軍なら夕日を田指して走れば、明日は必ず見えます」  
訳。生徒会会長の椅子まで後一年ですね。「まだ決まってねえよ」  
ファミレス。飛永はスペゲティで諸戸さんはオムライスを注文して  
いた。

「お待たせしました」僕はトマトジュース。「オイ、梅垣。食いも  
んを頼めよ」

腹減つてない。会長と話してどつと疲れた気がする。疑われていな  
くて

よかつた。ゴクリ。「紙パックの方が美味しいな」店員に言つて

ストローを貰う。「…………」飛永と諸戸さんは顔を呑ませ

深刻そうな顔をした。「あのよお、疑つてるわけじゃねえんだけど  
メールでもそんなことを言つてたな。『犯人は、お前じやねえんだ  
よな?』

手が震えていたかもしれない。「休日まで学校に来たくないよ」急  
に心拍数が上昇

していたかもしない。「だよな」変なこと言つて悪かつたよ。木ラ。俺が

奢つてやるから食えよ。とフライドポテトやらハンバーグやら迷惑な

ほどに注文していく。食べられるのか、コレ。迂闊だった。

てつきり会長が僕を疑つてはいるから呼ばれたと

思つていたが、まさか飛永だつたとは。

でも。どこでそう思つたんだ?

「私はかりんとうを所望いたします」

「んなもんあるか」生徒会室に置いてきたなあ。

会長の昼飯になるのだろうか。「伊佐木先生無事だとよ」

「保健室の?」会長も何か言つてたな。「兄貴から聞いてねえの?」

病人は。学校側の都合で、救急車を呼べなかつた人は「伊佐木先生  
だつたのか」

生徒だつていていた。「精神状態も安定したし、問題ないつて兄貴  
からメール來たぜ」

精神状態?「怪我の状態は平氣なのか」「すつ転んで左足を捻挫し

た程度だとよ

左足。「先生も左階段事件の被害者になつたのかい?」「ああー…違つ、違つ

何にも聞いてねえんだなあとがつがつと食べる。「聞いてもいいのかい?」「う

「悪質な犯人は未だ逃亡中です。なんらかの形で再び現れるでしょう」

諸口さんは知つていのよつだ。会長は一般生徒には教えられんと

言つていだが、飛永はどうせ、月曜日にはバレちまつからと話してくれた。

多分、昨夜。「校舎裏に赤い塗料をぶちまけやがつたふざけたヤツがいたんだよ」

「そこひつて」「あん?なんだ、知つてんのかよ。飛び降り自殺があつたト」

姉が屋上から転落して落ちたト」。草花が咲き誇る綺麗なトロ。

「鳩潟先生に怒鳴られたからね」「ああ。入学式の日か」

道に迷つたといふ言い訳を聞いてくれなくて

大変だった。副会長だった飛永先輩が助けてくれたけど。

「塗料を屋上から投げたってことは分かったんだけどよ、変なんだ」

「どこが?」「ドアを開けた形跡がなかつた」「普通に鍵を使ったんだろ?」

昨年の僕みたいに。無理矢理抉じ開けなくとも、鍵があれば、ドアに傷は残らない。

「そうじゃねえ。階段上がつたとここの床もドアノブにも均一に”埃”が積もつていたんだよ

「なら、犯人は屋上からではなく、校舎内の窓から投げたとか」「だから、変なんだろーが

否、校舎内に入らなくとも、その場で液体を捨てることはできる。何がおかしいのか。

「屋上に、犯人と思われる上靴の足跡と大量の紙パックがあつたんだ」紙パック。

塗料を入れていた容器か。埃が積もつていた。誰もドアに近づかなかつた。

誰も屋上に繋がる階段を上らなかつたのに、屋上に足跡があつた。

「ドアを通らずに、屋上に入る方法か」「先輩の幽霊だつたりしてな」

「1985年の初代機のUF-Oキヤツチャーの景品は上限価格は200円でした」

屋上の周りに他の建物はない。否、数十メートル先だつたらアパートはあるが。

3階建てだ。高度が足りない。乗り移れる距離ではない。否、空を飛べたとしたら？

「タケコプターを使えば……」「助けてよードラえもんって阿呆か！つーか、びびった！」

「梅垣がボケるとこ初めて見たぜ」訂正。「否、間違えた。ヘリコプターを使えばと

「梅垣がボケるとこ初めて見たぜ」訂正。「否、間違えた。ヘリコプターを使えばと

「梅垣がボケるとこ初めて見たぜ」訂正。「否、間違えた。ヘリコプターを使えばと

「梅垣がボケるとこ初めて見たぜ」訂正。「否、間違えた。ヘリコプターを使えばと

確かに、変な話である。手がかりがないから、数ヶ月前に屋上の侵入に失敗した

犯人を会長は探していたのか。不謹慎な野郎がいたもんだ。姉を馬鹿にしてるのか。

でも。どうして昨日だつたんだろう。姉が亡くなつたのは冬だし、  
2年前だから

既に姉と同年代の先輩は卒業して大学生だ。事件当時にいたのは、  
校長や

伊佐木先生のようなこの学校に残つてゐる数人の教師だけだろうし。

復讐：ではないよな。誰について話になつてくる。でも。犯人が

姉の知り合いだとすれば、眞実を握つてゐるかもしだれ

ない。姉の死を学校に思い出させたのは理由がない。

あつたとしたら。始業式を中止にさせ

なきやいけない理由があつたと

したらどうだらう。考えすぎかな。

でも。犯人と姉になんらかの繋がりがあれば。

真実にたどり着く鍵は手に入れられるかもしれない。

姉が亡くなつてからも、校舎裏に咲く花を手入れしていたのは保健の伊佐木先生だつたらしい。枯らすのは可哀想。花に罪はないと春に新たな種を植えた。立入禁止になつた場所で、生徒に綺麗な花を見せられなくて残念だとぼやいていたとか。

「紙パックのトマトジュースも植物も同じ被害者だよな」

「ゴクリ。思わず、グラスに入つてる赤いトマトジュースを見つめた。赤い塗料つてトマトジュースだつたんだ。」それで飛永は僕を疑つたのか

「違えつて。俺だつて疑いたくなかったんだけどよお、茄那が」

「私は、梅垣さんつて毎日トマトジュースを飲んで

「いますねと事実を述べただけでござります」

「お前なあ！と2人は食べ物を取り合いつつ言い争つた。

「夫婦喧嘩はそのへんにしてくれ」僕の前でイチャつくな。

1年生のときは諸戸さんもクラスメイトだったから知っている。

僕が毎食に紙パックに入ったトマトジュースを飲んでいたことを隠していなかつたし、姉がトマトジュースを好きだったわけでもない。

だとすれば、犯人も知っていたとすれば、この事件はどうなるだろう。

僕が毎日トマトジュースを飲んでいたことを知つてれば、上手くいけば罪を

他人に擦り付けられると考えたのではないだろうか。人に恨みを買つた覚えはないけど、理不尽に、首席だから学年トップだからと逆恨みをする人物もいる。

「これは、紙パックのトマトジュースに対する罵詈だ」と僕は怒るべきだらうか

ピンポン。「トマトジュースを「人差し指で一つだと示し、グラスを

店員に下げる。ま。飲んでから考えよう。仮定を裏付ける

証拠が出てこなければ、ただの妄想に過ぎないのだから。

場所が場所だつた。2年前に女子生徒が転落死した校舎裏に

倒れる保健の伊佐木先生と真っ赤に染められた草花。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3622y/>

---

三日月が見下す夜に

2011年11月24日16時53分発行